
隠れキャラ

魔狗羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隠れキャラ

【Nコード】

N5086A

【作者名】

魔狗羽

【あらすじ】

友達……俺ら学生が最も大切とする存在。だが、非情で残酷な“ゲーム”により、その友情はひび割れていく……。 “ゲーム”に立ち向かう五人。性格の違いから、それぞれの行動に違いが生じていき……たどり着いた真実とは……！？

File 1： 独りの夢

「健、今日何する？」

純が公園のぶらんこで立ち乗りしながら俺に聞いてきた。

「ん…何するつつつてもね…」

「…何だよ、もういいよ。帰ろうぜ、皆！」

……皆”……………？

俺は今、昔からの親友・純・と二人で話していた…はずだった。

それなのに、”皆”……………？

…すると、公園の陰からクラスの皆が出てきた。

「……………！」

元々、純はこんな短気な性格ではない、というか何も怒らせることは言っていない。

しかも、突然現れたクラスの友達四十人も怒った、というより物凄
い冷たい目付きで俺を見下している。

「な…なんなんだよ！俺がなんかしたつつーのかよ！」

俺の叫び声に反応したのかそうでないのか、友達が一人、また一人
と公園から去っていく。最後に純が「お前は一生ゲームの中でもが
き苦しむんだよな、この裏切り者が…」と言い残して、去っていっ
た。

……ゲーム……………？

ただ一人で立ち尽くしていた時、いきなり視界が真っ赤になり……

……目が覚めた。

……夢？朝から随分変な夢を見てしまった……って、ここどこだ！
家…ではない。絶対。一応ベッドの上で、掛け布団もかかっている
でも……。

何が何だかわからず、眠気がすっかり覚め、ベッドから跳び起きた。

そして、気付いた。

腰に、黒いベルトのような物が巻き付いていて、ちょうど日曜の朝にやるレンジャーもののアニメの戦闘服のように、ベルトの前（お腹のあたり）に何か付いている。それには蓋がついていて、指をかけるとカパツという音と共に、簡単に外れた。すると、蓋を開けたのと同時に、中から紙がはらりと落ちた。その紙を拾い、その小さい面積の中にぎっしりと書いてある文字を読み始めた。

「運命のサバイバルゲーム！大切な仲間を蹴落とし、自分の命を守り通す、そんな勇者は誰だ！」

なんだ…これ…？

運命のサバイバルゲーム…？

大切な仲間…？

多く疑問を抱えたまま、とりあえず読み進む。

「このゲームのプレイヤーは五人！ゲームのクリア条件は簡単！自分以外のプレイヤーのベルトに付いているスイッチを押し”ゲームオーバー”にすること！もちろん自分で自分のスイッチを押すのは自殺行為！それでは…GOOD R a c k！！」

File 2： 観察と考察

ど…どういうことだ！？健は夢が覚めてから何回目かの疑問を呟いた。それに…。

健は”大切な仲間”と”プレイヤーは五人”という言葉に引つ掛かっていた。

つまり、自分以外にも自分と同じ状況下に置かれている者があと四人、いるということだ。

それに…なぜか”ゲームオーバー”にとても恐ろしい響きを感じる。”自殺行為”というのも…。

と…兎に角！この近くにいるはずの”仲間”を捜そう。一人よりも二人の方がいいに決まってる！…いやそれ以前に一人だと怖い。

そして、冷静になってゆつくりと部屋を見回した。さっきまで気が動転していたのくに見ていなかった。学校の教室を一回り小さくしたくらいの広さの…多分寝室だろう。二つあるベッドの他にたんすや本棚等が置いてある。

そして、ドア…。

この先に何があるのかはわからない。

が、ずっとここに留まっているわけにはいかない。健は意を決してドアを開けた。…廊下に出た。ホラーゲームに出てくるような薄暗い廊下ではなく、ホテルの廊下のような明るさで、正直嬉しかった。そして今更ながら気付いたことがもう一つ、自分の服装である。これは…迷彩服…？ちゃんと同じ柄の帽子や靴まで付いている。さらに、壁に掛かっている時計をみた7：20をさしている。…まあこれが正しいとは言えないが…。

さあ、扉は沢山ある。早く仲間を見つけなければ…。

File 3： 悪寒と発奮

何処だ…！ここは…！

眠りから覚めた拓・火宮 拓・は、辺りを見回した。

俺は…昨日家で寝たはず…？

意味がわからず部屋にたった一つ取り付けられたドアを開けた。すると、明るく、まるで城か何かのように横に長い廊下に出た。

瞬間 - 拓は寒気がした。

拓はすぐにドアを閉めた。

…… なんだったんだ…今の…

そして、さつきから気になっていたベルトの真ん中の蓋を開けた。すると、スイッチ…のような物が現れ、同時に蓋で密封していたところにあつたであろう紙が床に落ちた。

拓は興味本位でスイッチを押そうとしたが、落ちた紙が気になり、それを拾ってみた。活字がぎっしりと書いてある。

「運命のサバイバルゲーム！大切な仲間を蹴落とし、自分の命を守り通す、そんな勇者は誰だ！」

なんだこれ…？

「このゲームのプレイヤーは五人！クリア条件は簡単！この館内に潜む敵キャラを見つけ、その敵に付いているスイッチを押すだけ！又、自分のスイッチを押されたり、館から一步でも出たら、その時点で”ゲームオーバー”だ！それでは…GOOD R a c k！！」

へ…え……！

何が何だかわからないけど、面白そうだ。見知らぬ館で”ゲーム”をする。登場人物は自分。仲間と協力し、敵キャラを追い詰める、というミッション。この現実とのギャップ。最高だ！

拓はこの理不尽な状況の中で、今自分がおかれている立場を楽しんでいた。

…で、仲間がいるんだよね…まず仲間を見つけるか…。拓はドアを開け、わくわくしながら廊下に出た。そして、隣のドアを開けてみた。106号室となっている。ふと自分が出たドアを見ると、105号室となっていた。

File 4： プライド

うう…ん…これは…：… どういうことだ？

目を覚ました仁・高野 仁・は、ベッドに腰掛けて、考えていた。
こうしてもうかなり経つと思う。

ここが何処なのか？誰の仕業なのか？自分以外のプレイヤーとは誰なのか？そして…クリア条件の意味とは…？

仁のベルトの蓋の中の紙にはこう書かれていた。

「運命のサバイバルゲーム！大切な仲間を蹴落とし、自分の命を守り通す勇者は誰だ！このゲームのプレイヤーは五人！クリア条件は簡単！自分以外のプレイヤーのベルトに付いているスイッチを押し「ゲームオーバー」にするだけ！もちろん自分で自分のスイッチを押すのは自殺行為！それでは…GOOD R a c k！！」

仁は小学校の時に学校から逃げ出したうさぎの居場所を、その話を聞いただけで推理し、それが当たっていたため、

「安楽椅子探偵」等と呼ばれていた。勉強は得意ではないが、何故かいじわるクイズや推理もの等は得意だった。

だから、そのプライドが、部屋から一步も出ずに”解けない”謎を解こうとしているのだ。

そう。この謎がこのままでは動かないのは解っているのだ。

因みに仁には双子の弟がいる。高野 涼、というらしいが、友達の中で涼の姿を見た者は一人もいない。というのも、涼は不登校の引きこもりだからだ。理由は不明だが、顔や声はそっくりらしい…。
しばらくじっとしていたが、もうどうしようもなくなって、仕方なくドアをゆっくりと開けた。ドアを振り返ると102号室となっていた。また、廊下の壁に掛かっている時計は7：45となっていた。

File 5： 友達は敵？

健は103号室とプレートが掛かっている隣の部屋のドアを開けた。
すると…

「…蓮！」

「…！お、健ちゃん！」この部屋は健が起きた時にいた部屋、つまり今さっき出ていった部屋と同じ造りになっていて、ベッドの上に蓮・渡美・蓮・が腰掛けていた。

「なんだ〜健ちゃんいてくれたんすか〜！俺今一人でビビりまくってたんすよお〜！」

「蓮…」

蓮は基本的にノリがいい。いつも周りがついていけなくなる程だ。でも今はそれが嬉しかった。

一人ではなくなったことが。

”仲間”が”友達”だったことが。

”友達”が明るく話しかけてくれたことが。

「にしてもさ〜、これどういう意味なんだろう〜な」

蓮はこの”ゲーム”の説明書らしき”あの”紙を片手の親指と人差し指でつまんで、ぷらぷらさせている。

「あ…ああ。でも、このスイッチを…」

「押したらゲームオーバーなんしょ？」

「う……ん……」

「でもさ、これおかしいよね〜。なんで”仲間”を”ゲームオーバー”させなきゃいけないんだろうね？」

蓮は調子のいい奴だが、観察眼は人一倍だ。

健もそれには違和感を感じていたのだが、結局今までに答えは出せていない。

”安楽椅子探偵”がいたらな……無意識に健はいつも一緒に遊んでいる仁のことを思い出していた…。

File 6： 陰の予感

「とりあえずさ、他の三人探しちゃおうよ。もしかしたら仁とか純とかいちゃったりするかもしれないし〜！」

「そうだな……。……… そうですねこの部屋103号室だよな……」

と言って、健は部屋のドアを開けて自分の部屋のドアを見た。104号室となっている。

俺が104で蓮が103だったら……。

確信はない。ないけれど……。

他の三人も101、102、105に居るのではないか……。

健は直感でそう感じた。

このことを蓮に伝えようと103号室の部屋に戻ろうとした、その時――――

「あ……け……健！」

ん……この声は……まさ……か……

「健だよな……おい！健！」

「ひ、仁……？」

振り返ると、”安楽椅子探偵”の仁が立っていた。服装は自分や蓮と同じ迷彩服に……スウィッチ付きのベルト。

「やっぱり……いたんだ！」

「え……じゃあ他の奴らも？」

「うーん……蓮はいたんだけど、他はわかんない……」

「そっか……」

ここに来てから、全てが驚きとため息になってしまっ

- - - - -

「運命のサバイバルゲーム！敵を全て破滅させ、自分の命を守り通す勇者は誰だ！このゲームの敵キャラは四人！クリア条件は簡単！全ての敵キャラのベルトに付いているスイッチを押し”ゲームオーバー”にするだけ！又、自分のスイッチが押されても”ゲームオーバー”だ！それでは…GOOD R a c k！！」

File 7： 家族か友達か

ベッドの上に置かれた一枚の写真と二枚の紙切れ。写真には暗い牢屋のようなところで一人の少女が手足を縛られているところが写されている。紙切れの方は”運命のサバイバルゲーム”云々と書いてあるものが一枚と…。

「このゲームで”鬼”は君だ。廊下に掛かっている時計が次に7：00をさした時、つまり12時間が制限時間だ。その時まで四人全員を”ゲームオーバー”にさせていたなら、君の勝ちだが、もしそれが出来なければ君の負けだ。君が勝てたら君を現実の世界…日常へと戻そう。勿論、君の妹も。だが、君が負けたら、君は”ゲームオーバー”だ。そして妹も残念ながら…ね。」

……これが二枚目。

そう、写真の少女とは純・渋谷 純の妹、咲である。

うそ……だろ？

信じられなかった。自分や妹の非常事態に。

紙を読んでから急いでドアを開け、時計を確かめた。7：45になっていたと、右の方からガチャ、という音が聞こえた。誰かがドアを開けて出てきたのだ。純は反射的にドアをさっと閉めたが、一瞬――見えた。自分と全く同じ服装の拓を――。

閉めたドアに張り付いて、純は戦慄した。自分がゲームオーバーにしなければいけない”敵キャラ”が…自分の友達であることに。

まだ拓しか見ていないが、そんな偶然はありえない。絶対にあとの

三人は健、仁、蓮だろう。

そして、”ゲームオーバー”――。

それは、最悪の場合、”死”だろう。妹の状況が、そう語っている。

取るべきものは、家族か、友達か――。

捨てるべきものは、家族か、友達か――。

純は、ベッドに腰掛けて苦悶した。

File 8： 大きな罰

106号室へ入った拓は戦慄した。この部屋は自分が最初にいた部屋と同じ造りになっているのだが、ベッドの上に、人が倒れているのだ。いや、普通だったただ寝ているだけだ、と思うかもしれない。が、その人は自分と全く同じ服装をしているのだ。もちろんスITCHも……。急いでベッドに駆け寄ると、すぐ側に小さい紙切れが置いてあることに気付いた。

「ゲームオーバーになったら…死ぬんじゃないかな？」

……………！

これまでの遊び感覚はどこかへ消え去ってしまった。これは本当の”サバイバル”なのだ。自分一人を守るために、他人を蹴落とす…。この紙切れの文のフレンドリーさも、逆に恐怖を感じさせた。

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い………

拓の心は既に恐怖心に支配されていた。

やらなきゃ、やられる……………。

拓に、野性本能が、芽生えた。

……………

「……………そういえばこのゲームさ、制限時間とかあんのかな。一人に

なんない限りここから抜け出せないとか？」

健は、蓮や仁と出会ってから、このゲームについていろいろ話し合っていた。

「ん〜、どうだろうね」

「もし無制限のデスマッチでしたら、誰かを代表にして、それ以外の四人が自らスイッチを押す、てのもいいかもね」

そう、まだこの三人はこのゲームの恐ろしさに気付いていないのだ？
「でも俺らをこんなわけなわかんないところに連れてきて”ゲームオーバー”がそんな簡単なものじゃない気がするんだ」

「何それ？」

「つまり……ゲームオーバーになったら、ただじゃ帰れないと思う」

その時、廊下の時計は8：10をさしていた。

File 9： 隠れキャラ

「とりあえずさ、あとの二人を探しちゃおうよ。いつまでもここに
いるのも難だしさ」

「おっけえっす仁長官」

蓮……。

「じ、じゃあばらになって探そう」

「ばらばらに……」

健は孤独が怖かった。が、

「うん。その方が効率いいからね」

の一言で切り捨てられてしまった。

でもやっぱり三人共怖いのだろう。数秒間の沈黙……。

「「「それじゃあ、行くか」「」」

- - - - -

部屋を出て、健は左へ、仁と蓮は右へ歩を進めた。廊下の両端に階段がついているのである。そしてそれは、上へのものも下へのものもあつた。どうやらここは三階建てで、ここは二階のようである。健はまず下へ向かった。

一階はホテルのロビーのようになっていた。

(いないな………)

- - - - -

仁と蓮は三階へ行っていた。そこは二階と同じ造りで、両端にある階段と階段を廊下が繋いでいて、その片面側にドアがついていて、それぞれ201、202、203、204、205号室となっている。

「じゃあ俺あっち側から順番に見てくから、蓮はこっちから頼む」

「かしこまり〜 だっちゃ!」

- - - - -

205号室のドアを開けた。やはり二階の部屋と同じ造りである。

(ここにはいないな……)

仁は204号室へ移った。が、204号室のドアを開けたまま、固まってしまった。

「……な…なんで……お前が……ここに……!?!」

- - - - -

201号室に入った蓮は、慎重に部屋を調べる。皆の前では気楽そうに見せているが、実は、頼りにされたいのだ。信頼されたいのだ。注目されたいのだ。それが、こういう行動に走ってしまう…。すると、遠くから仁の叫び声が聞こえた。

「うわああああ!! やめろおお!! 健——!!」

健……?

訳がわからず、205号室へ向かった。が、仁の姿は無い。204号室か……!

204号室のドアを開けて、蓮は驚愕した。仁がベッドに倒れているのだ。

「ひ……仁いいい!!」

息は……もうなかった。

File 10： 狂気破滅（前書き）

こんにちは！魔狗羽です！この物語とも言えないような幼い文字の羅列をご閲覧して下さっている皆さん！ありがとうございます！

いきなりでこんな長編というのが無謀だったのでしょうか、だんだん書きづらくなってきてしまっていますが、そんなこの小説に応援メッセージを送って下さった方がいらっしやいました！感激です！これは下手な文には出来ないな（笑）と思いながら書いていたらいつもより長くなってしまいました…。

…って、前書きが長くて飽きさせてしまったかもしれません…m（

——）m

それでは、ごゆっくり（^ー^）。

File 10： 狂気破滅

一階へ向かった健はここには何も無いと判断し、二階へ戻ろうとした。

すると、階段から仁が降りてきた。

「おお仁、どしたの？」

「おお、健か。三階には何もなかったぜ？蓮は絶対なんかあるってまだ残ってるけどな」

ん……仁…だよな…。なんか違和感があるような…？

「へ、へえゝあの蓮が。意外だな」

「じゃ、俺は報告係だから、もう蓮のところに戻るな？」

「お、おう」

じゃあな、と言って仁は右の階段を上っていった。

- - - - -

蓮は独りになってしまった。仁は倒れ、健は……よくわからないが、仁が叫んだ

「やめろおおお！！健ー！！！」

というのが気になって、会えなかった。

まさか…健が仁を…？

いやそんなことはありえない、と思いながらも、やはり気になる。

仮にもさっきまで一緒に会話をしていた三人である。仲間を大切に
する健がそんなこと…。

独り……。

蓮は怖くなった。一刻も早く仲間を…話し合いの出来る仲間を見つ
けなければ…。

蓮は202、203号室を調べたが、誰もいなかった。

蓮は二階へ降りた。

- - - - -

早く…早くこのゲームを終わらせてしまわないと……。

拓は二階を彷徨っていた。

いつもの軽い性格の裏返しなのだろうか、助かりたい、という一心
で”敵キャラ”を求めて彷徨う。

拓は一階へ向かった。階段を降りきる直前で、”敵キャラ”の存在
を確認した。

や…やった…まずは一人……

もはや拓を支配しているのは恐怖と狂気だけである。

だが、”敵キャラ”をよく見てみて、拓は驚いた。

あれは……健！

いくら迷彩服でも、今自分の視界に入っている”敵キャラ”は紛れもなく健だった。

拓が動揺していると、健がこちらに気付いた。

「あ…た…拓！」

と、友達であろうと敵は敵だ…。

普段では絶対こんなことは思わないだろう。だが、拓は”ゲームオーバーになったら死ぬ”という事実を知っている。

拓を狂わせているのは、死の恐怖だ。

- - - - -

「あ…た…拓！」

階段から拓が現れたのだ。

（やはり拓もいたのか…）

健の呼び掛けに応じずに、ゆらゆらと危なっかしい足取りでこっちへ向かってくる。

健は、殺気を感じた。

「ま…まで、おい！拓！」

聞こえない振りをしているのか、本当に聞こえないのか、無反応だ。

健は恐怖で動けなかった。

その時――

「拓！やめろ！」

そう言っただけ階段を駆け降りてきた――純が拓を後ろから羽交い締めにし……スイッチを押した。

「…うつ！」

拓は倒れた…死んだ。

友達の手によって…。

「健……ごめん！」

そう言っただけ純は土下座した。

「……え？」

File 11： 真実と犠牲

「ど…どういことだよ！」

すると、純は少し顔を上げ、また土下座のまま俯いてしまった。

「おい純！なんとか言えって！」

そうして、ようやく純は語りだした。

自分の妹が捕われていること。自分にこのゲームで”鬼”の称号が与えられたこと。自分と妹を守る為には友達を殺さなければならぬ、また友達を守るために自分と妹を犠牲にしなければいけないこと。

「今も階段の上から見てたんだ。拓が健を殺そうとすると。そうやって俺以外の奴等が殺し合ってくれば俺が殺すのは一人で済むと思った…妹と…自分の為に…」

「じ…純…」

「はは…俺は最悪な奴だよな…友達同士の殺し合いを黙ってみてたんだから…しかも死ななかったから…悔んだしな…」

「……………」

健は何も言えなかった。言うてはいけないような気がした。長い間考えに考え抜いて出した結論に文句はつけられなかった。例え犠牲が自分達だという結論だったとしても…。

- - - - -

二階にも誰もいない…

二階を蓮はずっと探していたが、一向に仲間は現れない。一階へ行
つてみようかな…。

すると、誰かが一階から上がってきた。

「おい！」

無反応…。

「おい！誰だ……」

蓮は固まってしまった。死んだはずの仁が…いる。

「え……ひ…仁……なんで…？」

仁がゆっくりと近づいてくる。

「蘇生したのさ…」

「う…や…めろ……」

蓮は廊下に倒れた。

File 12： 時間差と消失

「じ…じゃあ…なんで拓をころ…倒したんだ？」

なんで殺した、と言おうとしたが、土下座をやめて床に座ってうなだれている純にはきついだろうと思った。

「それは…嫌だったから…。狂った拓が狂気に全てを任せて友達を殺しているのが、耐えられなかったから…。」

キョウキニ、スベテヲマカセテ……

「俺はもうこれ以上友達が死ぬのを見るのが嫌なんだ！……仁だつて…狂った奴の犠牲になんかなりたくなかったんだ……」

「仁…？」

「知らない…のか？三階で仁が204号室のベッドに倒れてたよ…仰向けで顔が青かった……」

「な…仁が！？……！ちょっと待てそれ何時くらいわかるか？
「え…た、確か9：20くらいだったかな…三階にも二階と同じところの時計があつてさ…それでわかったんだけど……」

一階にもある。今は…10：00だ。

「さっき仁一階に来たけど…確か9：30くらいだったぞ」

「え…嘘だろ…じゃあ三階へ行ってみようよ」

- - - - -

「だ…誰だ？」

三階へ上がるために階段で二階を通る時、床に俯せで倒れている誰かを発見した。
赤いカーペットが敷かれている明るい廊下。それが迷彩服を目立たせている。

「な……………蓮！」

俯せになっている蓮を抱いて息を確認する。…………やはり、死んでしまっていた。

「くそ！」

「純…………」

「もう三人も…………あとは俺達だけか…………」

- - - - -

三階に着いた。健は204号室のドアを開けた。が…………

「…いないじゃんか」

「え…おい、嘘だろ？」

純は部屋の中に入った。…いない…。

「部屋の番号間違えたか…？」

そのあと、201、202、203、205号室を全て調べたが、
仁の姿は見えなかった。

「いない…よ？」

「そんなはずは…？ひ、仁が消えた…」

File 13： 狂気から日常へ

二階。106号室。一人の男がベッドに腰掛けている。男は迷彩服を着て、ベルトを巻いている。そしてその真ん中にはスイッチがついている。

”キョウキニ、スベテヲマカセテ……”

男はくつくつと笑う。

男の隣には同じ服装の男が、ベッドに俯せになっている。

男は笑い続ける。

その時……

「「ここか！」」

二人の男が入ってきた。二人の男の名は - 東条 健 - と - 渋谷 純 - だ。

- - - - -

数十分前。204号室にて……

「二人ともこのゲームを終わらせる方法が一つだけある」

「え…？」

「このゲームの主催者を見つけたす…！」

「……！」

- - - - -

ベッドには男が座っている。笑っていた。その隣には、迷彩服の男が俯せになって倒れていた。

「お前は高野仁か？高野涼か？」

なおもくつくつと笑い続ける男に純が聞く。

「そんなものはどうでもいい。それより早く殺し合いを見せろ。早く死んだ姿を見せろ。……くつくつ、みんな俺がいじめの時に言われた言葉だ」

「じゃあ…お前は高野涼か！」

ふう、と男・高野 涼・がため息をついた。

「そうだ。俺はこのゲームの主催者であり、このゲームの隠れキャラだ」

「隠れキャラ……」

「火宮のゲームの説明書には書いたがな…隠れキャラは俺だ」

「隠れキャラ…だと…？ふざけんな！強制的に人殺しさせて、しかもこのゲームを散々引つ掻き回しやがって！俺達は知ってた！お前の行動全てを！」

「ふっ……」

「まずお前は106号室で倒れた振りをした！そして隣の部屋の拓に見せ付け、実質上二人目の”鬼”にした！そして204号室に潜み、仁を殺したんだ！さらにそのあと、動かなくなかった仁をここに運び、俺達を攪乱させた！」

純は、一息に言った。息遣いが荒く、はあはあと、かなり興奮している。

「お前は…お前は何がしたいんだ！これだけ兄弟とその友達の命を弄んで！何がしたい！」

「俺も言ってやりたかった…何がしたい、ってな…」

「え…？」

「俺は小学三年生の頃からいじめられ始めた。

そしてそれは段々とエスカレートしていく。

俺をいじめた奴等は俺を”ゲーム”で遊んだ。

ある時は”今から三十分以内に八百屋から野菜を盗め”、と言い、ある時は”駅で五人以上の通行人を殴れ”と言った。

それらは強制的に始められ、出来なければ”罰ゲーム”があった。それに何年も耐え続けていた。

ある日、奴等は俺に”兄のノート三冊にペンキを塗れ”と言ってきた。

罰ゲームが怖かった俺はそれをやった。

そして兄に何故やったか理由を聞かれた。

俺がいじめを受けているのはなんとなく知っていたみたいだが、ゲームのことを言うと兄は驚いていた。

が、兄は”ま、頑張れよ。”

いつかはそいつらも飽きるだろうし”と言った。この辛さは…”ゲーム”をやったことのある者にしかわからない。すると突然この辛さを多くの人に知ってもらいたくなった。これが…全てさ…だがその結束力を見せ付けられて、逆に自分の孤独を改めて思い知らされたがな…”

健と純は啞然としてしまった。仁がそんなことを言っていたなんて…。

気がつくと、純が震えていた。

「ふざけんじゃねえよ……全然お前の気持ちなんかわかんねえ！…お前は…一生ゲームの中で苦しむんだ！この野郎！」

純が……涼のスイッチを押した。

純の言葉にはとなった涼は、そのままベッドに倒れこんだ。その顔が少し悔しそうだった。もちろん、ゲームで負けたからではないだろう。

- - - - -

「おはようございまーす」

朝のホームルームの時間、健と純はぼーっとしていた。あれから初

めて通う学校だ。学校や家にはちゃんと休んでいた間の話はついていたらしい。

ただ、健や純の友達三人と高野涼は行方不明ということで、警察が搜索している。学校にも家にも警察にも本当のことは言っ気がしなかった。

二人は教室の窓を開ける。朝ということもあってか、日の光が眩しい。

二人と純の妹は、また”日常”の中で暮らし始めた。だがこの先日常から消え去った友達や涼のことは、絶対に忘れないだろう。

- 完 -

File 13： 狂気から日常へ（後書き）

こんにちは！魔狗羽です！（この後だらだらと自己満を語っていくので、飛ばしていただいて結構です（笑））

全13話の長編”隠れキャラ”！この小説は僕が初めて書いた小説です！今日これを仕上げた時には達成感で胸がいっぱいでした！File 10：辺りで「次の話はどうしよう」と悩んでいた時に、応援メッセージ（アドバイス）をいただき、そのアドバイスに沿って最後まで頑張りました！嬉しかったです！

小さい頃から本が好きで、こんな面白い話が作れるなんて、とよく思っていました。そして今、僕は話を作る側になりました。面白くても面白くなくても、（よくも悪くも）何かを感じた方は、よければ僕までメッセージを送って下さい！お願いしますm（――）m

では、また次の作品で（^ー^）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5086a/>

隠れキャラ

2010年12月11日02時46分発行